

創設時代の思い出

武田学千

昭和二十年八月十五日、日本は未だ遭遇したことの無い敗戦により国家体制の大転換を余儀なくされ、新しい民主主義体制下における人々も、それまでの国家観・人生観・価値観等の一部あるいはすべての修正を迫られました。思考や行動の上で何かと戸惑いを感じ、そのうえ長い戦争により物質的に多くのものを失ったため、衣・食・住のすべてに多くの人たちが不自由をし、物心共に社会的な混乱と荒廃状態にありました。その戦後二年有余の間、学長自らも見聞体験してみても、そのときまで長きにわたり日本固有の風土に培われた婦人独特の特殊性が押し流されてしまっているのではないかと、今こそ自分一人でもその歯止めとなり、それを守ることができたらと考えたのだと思います。

昭和二十二年の初秋頃からと思えますが、それまでの二十五年有余の女子教育経験と、広島県庁地方課主事としての二年有余の教育行政の経験を生かして、自己の信念に基づいた女子教育を実践し、自分が教育界の末席に身を投じた時からの総決算を試みようとして、何年生きられて、それがどこまで成果を挙げることができるか解らないけれども、その芽を出してみたいと学校設立を決意したものだと思えます。当時、私は広島文理科大学の一年生で日々の勉学等に追われていました。

学校の建学の精神として、当時の社会情勢と自己の長年の女子教育に対する信念・経験とに基づいて、今の学園訓三カ条を学園創立の根幹としたのです。

その三カ条の学園訓は、日本女性の生き方として永遠に変わることはないと思ふ謙虚にして優雅な人格、常に正義に組みしようとする麗しい心を養うとともに、それを信念をもって実践する行動力を培い、また、戦後の「自由主義」の誤解から自己の自由のみを主張する人が多い中で、その自由と表裏一体であるべき自己の責任を、自由と同等に重んじる自覚を堅持させなければならぬ、という固い信念を表明したものだと思ひます。

このような三カ条の学園訓を基礎として樹立した教育方針としては、人間づくりを基本としていました。しかも、特に当時の社会が、また多くの人たちが求めていた女性としての特性を生かした特技を身につけさせ、その上に教養の高い女子の教育を目指して、道徳・倫理・茶華道・和裁・洋裁・手芸を教授する学校を、武田の家の郷里であり、旧安佐郡の古くからの中心地、可部町に設立しようと考えたのです。

その考えが決断されるまで、次のようなことがありました。

昭和二十二年夏のことですが、頸部静脈瘤を患らい、大内五良医師（前県医師会長、当時は可部町にて開業されていた。）にその治療・手術を受け、約一カ月で退院し自宅療養となりました。従って、当時私は大学に学びながら、家事一切（家に女の子供がいなかったので炊事には少々慣れていました。）を受け持たざるを得なくなり、そのうち一番努力を使ったのは、朝夕の食事ももちろん病人の昼食も作ることでした。朝は五時半に起き、夜は夕食の後始末と朝食の準備をすますと十時頃となり、それから大学での講義のノート整理をと思つてもなかなかできませんで、授業中によく居眠りをしました。試験前にはノートのブランクを埋めながらの勉強に苦しんだことを、その後何年も夢に見ることがあるほどでした。

その後病気が全快しました初秋頃に、長年心に温めていた女子教育を決心しようと思ひ立つたようです。なお、後に大内五良医師とは、このご縁で再度大内病院に入院することになりましたが、同医師は学長の命の恩人であると

時に、学園設立以来の学園の監査役であり、有力な協力者のお一人です。

次に、その校地・校舎・教具・備品のための資金については、学長の実兄神原勝太郎の有形無形の協力援助と、わが家の財産すべてが投入されました。その上に、学長が常日頃より座右の銘としている「なせば成る、ならぬは人のなさぬなりけり。」の信条でその調達に大変な努力をしたことにもありますが、とりわけ学長が教師として初めて勤務した旧安佐郡久地地方の教え子の方たち、第二の任地呉の阿賀地方の教え子の方たちに多大の協力をしていただいたことを忘れることはできません。

当時の社会の経済事情は、農村地方が豊かであったこともあって、教え子の方たちは、学長の家にあつたいろいろな物を（そのまま、あるいは学長が自分の技能を生かして加工した。）資金に還元することに力を借してくださいました。その品物の運搬等は専ら私の担当でした。

私たちは昭和十九年、現在の安佐南区佐東町緑井（当時、安佐郡緑井村）の国鉄可部線緑井駅に近い沖本さんの家に、旧広島市内舟入町より疎開移転していました（疎開先のお宅が奇しくも本学の横山先生と縁戚にあたる家であることが後になって解るのです）。その緑井の家から、ある時は可部線を利用して布駅まで行き、駅前の太田川を渡って、切り立った山添いの河湊の道を河上に二里ばかり昇るとある教え子の方の家に品物を届け、以前お願いした品物の代金を戴いて帰ることもありました。また、現学長が呉市の阿賀実科女学校で教べんをとった期間が長かったため教え子も多く、学長が学校を設立するとの報に、皆様が大変な協力をしてくださいましたのです。その何人かの世話役のお家を私は訪ねて回ったりして、資金の一部を調達しました。

現在でもその当時の多くの人たちが、今だに学長のために、ある人は着物、ある人は洋服、ある人は好物の食べものと、四季歳々に持って来てくださったり、送ってくださいますが、これこそ教師冥利に尽きると申すべきだといつ

も思います。こうした多くの方々のお陰で、資金は充分でなくとも何とかできたのだと思います。しかし、現在から當時を思い起してみると、これも多くの方々の善意と、学長の不屈の努力心「なせば成る」の気持が天に通じたこととの賜物といわざるを得ません。

このようにして得た資金の範囲内で、校舎となる建物を、どこで情報を得たのか知りませんが、学長は古市町（現在の安古市町中須の国道五四号線に面した所で今はニシャという会社の工場になっている。）に見つけました。戦時中、マニラロープ製造会社が女子工員の寄宿舎としていた建物で三棟あり、その内の二棟を購入しました。それとて戦後間もない水害で一階部分の壁が落ちていて、小舞竹が見える状態でした。その建物を解体して可部町に移築する計画で、可部町内に適当な校地を物色していましたが、なかなかみつからなかったようです。

校具・教具は現在から考えるとお粗末至極なものでした。当時としては机に当たるものは、普通筥台（^{へらだい}一尺五寸×六尺、すなわち約四五cm×一九〇cm）の座机で（現在も校内の倉庫に保管されている）、これが二十五台。黒板（四尺×六尺、すなわち約一三〇cm×一九〇cm、現在のように一枚板でなく何枚かの横長の杉板で作られ、それに立脚用の足が付いている。）三面、これは日が経つに従って乾燥して横板との間に隙間ができるので、時々その修理をしなければいけません。それに、当時としては貴重品であり、入手困難なミシン四台（内二台はシンガミシンで米国製、残りの二台は戦時中に焼けたものの再生品でよく故障をするので、これも時々修理をしなければなりません。）以上が、入学予定者を約四、五十名二学級分と考えての、校具・教具の主なものです。

建物、校具等は準備できても、開校予定に間に合うように移築する土地の入手がなかなかできないので、それまでの暫定措置として、八木村（現在の佐東町八木地区）・三入村（現在の可部町三入地区）・亀山村（現在の可部町綾ヶ谷・大毛寺・行森地区）、この三カ村組合立の高宮中学校の校舎の内一棟、三教室を二十三年八月末までの期限付で

借り受け、そこで念願の可部町での開学をすることにしましたのです。当時のこの中学校は新築のものでなく、日本の軍隊が使用していた倉庫等のようなもので、その位置は現在可部税務署のある場所で、現国道五十四号線の可部三丁目から柳瀬方面への道路を約三百メートル入った所でした。

そこへ、緑井村で製作された前述の校具と、古市町から移築するべく購入した建物にあった畳を約六十枚と教卓・戸棚等を搬入しました。開校準備をするのは主に家族のものの仕事ですのでこれまた私の担当でした。当時のこととて鉄の大八車（沖本の本家の沖西の新品同様なものを借用）で、可部町の高宮中学校に運搬を三月末頃まで何回も往復しました。時には夕食を取ることもできず夜九時頃に空車を引いてやっと緑井の自宅に帰ったことを、三十五年過ぎた今日も鮮明に憶えています。当時は一家をあげて皆が一生懸命でしたが、今になってみれば苦しかった一こまこまが懐しく思い出されてなりません。

以上のように、なんとか準備を整えて校名を広島県可部女子専門学校（二カ年制の本科、一カ年制の専攻科）として、県の設立認可を受けました。入学生徒は予定していた数の半分にも満たない十二名でしたが、昭和二十三年四月十五日に、開校入学式を現学長以下二名の教員（新尾先生、大原先生）とともに厳かに挙げて、今日の学園が「呱呱の声」をあげて誕生したのです。

そうして、少ない生徒ながら現学長を中心に皆「私たちは本校の第一回生である」との意気に燃えて、先生とともに日々の勉学に励んでおりました。しかし、思わぬアクシデントが開校後約一カ月にして起こりました。それは、現学長がこれまでの過労がもとで高熱と腰の痛みをとまなう病氣となり、前述の大内五良医師（当時は広島市大手町に病院を開設されていた）の診察を受けたところ、脊椎の結核性カリエスで直ちに入院加療しないと生命に関わると診断されて、即刻入院を余儀なくされ、約十カ月の入院をしました。その間生死の間を二カ月近くさまよってしまし

た。病魔を克服できたのは、大内医師の献身的な治療と、生徒・先生・学長の実兄・家族の祈り、協力・援助と、学長自身の精神力によるものでした。昭和二十四年三月中旬に、一応退院の許可の出したことは、奇蹟という以外にないと思います。

このアクシデントにより、古市町に購入した建物の可部町への移築は遅滞する羽目となりましたが、高宮中学校からその一部を借り受けた教室は、八月末に返還という契約は守らなければなりません。七月十五日より、生徒十二名と先生二名と私と総勢十五名で校具・教具・畳等を古市町の校舎に、やはり当時の唯一の運搬車でありました大八車で何回も往復して運搬し、これを終えたのが七月二十三日でした。先に述べましたように、古市の建物は水害に侵されていたことから、一階部分は壁は落ちており、建具も障子・ガラス戸がいたんでいましたので、先生二人と私の三名で夏休みの中にその補修・掃除をして、なんとか二階部分と一階の一部を使用できるようにしました。この時の先生・生徒には、武田ミキ校長が入院不在中であっても皆が力を合わせて自分たちの学園を守り抜こうという気概が感ぜられ、また先生・生徒のただひたすらに自分たちの学校のためにと我を忘れての献身的な努力に、頭のさがる思いでした。この愛校精神は永く本学の伝統的な校風となり、それがその後の学園の発展の大きな原動力となっており、確信しております。

翌年二十四年三月下旬、大内医師の格別の診療により学長が退院することができた時は、全員がいかに喜んだことか想像に余るものがあります。退院後は、木製のベットの上でギブスの中に寝たまままで学校の教育にあたったのです。この時も食事等の家事は私の担当でした。この状態での学校運営は昭和三十二年まで続きました。

そうして学園の教育方針等が少しずつ理解されて、翌年昭和二十四年四月には新入生が二十六名入学し、総生徒数三十六名となりました。この時に、本学園の現理事の一人である垣内文子先生が、洋裁の先生として赴任されまし

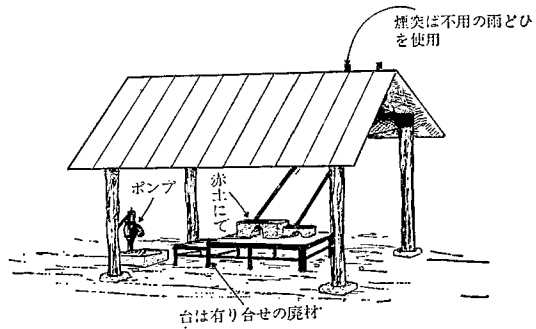
た。

同年六月には将来を考えて、当時の校舎に附属していた部分二百二十余平方メートル（七三・五坪）を買収しました。来年度に備えて、生徒、先生、私と共に、水害に浸された部分の窓、壁、床、畳、建具の補修を放課後にしましたが、当時の生徒たちは、自分たちの学校は自分たちでと当然のことと思ひ、よく協力をしてくれました。このことは、私にとりまして、今になっても当時の先生・生徒にただただ感謝の念を禁じ得ませんし、時あらばその恩に報いたい気持を今だに持っております。この十二名の生徒たちは二年後に、私の書いた式辞と、足踏み中古オルガンの君が代、仰げば尊し、螢の光の伴奏で、卒業式をしましたが、彼女たちは私にとって妹のような気がします。

前述のように、現学長の病気で入院のアクシデントがあったにもかかわらず、創立したばかりの学校の教育運営ができたのは、学長の意志を体した新尾、大原両先生のおかげですが、特に長年現学長の薫陶を受けられた新尾一枝先生のご尽力の賜であることは、忘れてならないと思ひます。先生は現学長の教え子であり、向学の志が強く、独学で教員免許を取られて教職につかれておられました。開学にあたって是非にと乞われて本学に来てくださった方で、現学長の教育方針の継承者であり、最も信頼のおける方であつたと思ひます。

かくして昭和二十五年四月を迎えた時には、三学級編成、生徒数九十五名、教職員七名となり、この年より一階の校舎の一部を寄宿舎とし、舎生として出雲許子外八名を受け入れることとなりました。

彼女等の出身地は、旧安佐郡飯室、小河内、伴等で、九名が自宅から持参した食料品を共同で校舎の中庭にある井戸水ポンプとその流し台しかなない不便さを克服し、七輪を用いて生活を共にしていました。これを見た私は、そのポンプの横の位置に次の絵のような屋根、それに二基のくどを作ってみました。この時には舎生の皆さんが大変喜んで、現在も同窓会・役員会その他のことで時々本学を訪れてくれる奥田許子（旧姓・出雲）さんの顔をみると、



二〇名、教職員十七名

となりました。

教養科目は、倫理、道徳。女子の教養として茶華道、書道、手芸、和洋裁。特に洋裁は女性のものはもちろん男物背広、和裁はふとん・夜衣・はかま・うちかけに至るまで教授していました。手芸には染色と刺繍があり、そのうち手の混んだ染色は数種の型紙等を用い、いくつもの色を染め出す臈纈染、布地を木綿糸で硬く括って花模様等を染め出す絞染を教えていました。刺繍では特に日本刺繍に力を入れており、七福神の宝船の図柄等の中袱紗・大袱紗、慶

創設時代に生徒たちと苦勞を分かち合ったこととして思い出します。しかし昭和二十六年一月には、校舎の一端を寄宿生の炊事場兼調理実習場として十五坪拡張増築し、約半年で私の苦心作の中庭の炊事場も、その役目を終えることになりました。この炊事場ができましたので調理の授業が加えられましたが、その上に、昭和二十七年には寄宿生が六十二名、昭和二十八年には寄宿生一〇八名になっても、役目を充分に果たしました。

なおその間、

昭和二十六年度——生徒数二三〇名、教職員十五名

昭和二十七年度——生徒数二六五名、教職員十六名

現学長が昭和二十四年三月中旬に退院しましてから後の学園は、寄宿生が増加するのと併行して生徒数も多くなり、昭和二十八年四月には

本科生二四〇名余、本科卒の研究科師範科五十三名、夜間部二十五名、合計三

事用の翁媪、鶴亀また竹林を背景にした勇猛な虎の掛軸を作っていました。そうしてこれらの大作は、学期中の授業時間だけではできないので、多くの生徒たちは夏休暇の約二十日間を学校に泊まりこんで共同炊事をしながら、日夜を問わず木枠に張られた絹布の下絵にそって、時には居眠りをしながら、時には疲れてその場に寝ころびながら、一針一針精魂込めて作っていました。この日本刺繍の製作は本校の伝統行事であり、彼女たちにとってその労作は、一生の思い出や宝となっていることでしょう。

学長入院不在中のうち、八月から翌年三月までは常勤の先生二名と私だけですので、新尾先生を中心として教育も日常の生活も一緒でした。この学校の年々の発展の基礎を作ってくださいだったその新尾先生が、その後の学校状況、また今日の学園の規模を見てもらうことなく、昭和二十五年十一月に若くして逝去されたことは、痛恨の至りであります。これを思うにつけ、新尾先生だけでなく、その後の多くの教職員の方々が、学園のために御苦労され御貢献くださった御恩のほんの一部にでもお報いできればと、昭和五十三年に恩頼堂（命名は、本学文学部国文学科教授岩佐先生、昭和五十五年八月二十七日逝去）を学園敷地の北端に建立いたしました。仏壇を設け、その霊をお祀りし、毎年創立記念日の四月十五日には法要をしています。

かくして、学校創立以来の念願でありました可部町への学校移転のために、昭和二十八年八月に可部町立旧可部中学校（元中原小学校）の校舎と校庭の一部を買収することができました。その位置は現在の国道五十四号線をはさんで、一方は大和重工正門付近とその反対側の日産プリンス販売会社のある場所で、校舎約一五〇〇平方メートル（約四五〇坪）、一棟は二階建、二棟は平屋建で、校地四五〇〇平方メートル（約一三六〇坪）でした。

翌年の昭和二十九年四月には、待望の可部町の校舎で、二七八名の新入生を迎え、校長外専任教諭・助教諭十二名、非常勤講師四名、舎監一名、事務員一名で入学式を挙行することができました。この時は校長を初め全職員、遂

に念願の地・可部の校地校舎での教育が外形的に整ったことを、心から喜んだものであります。

当時、敗戦という未曾有の困難に遭遇し、日常の生活に難渋しながらも多くの子女が集まり、中には遠隔地より笈を背負って入学するに至ったことは、現学長が自己の教育理念を堅持し、なせば成るの不屈の精神で多くの苦難を乗り越え、教育一筋に生きんとする気迫と実践力を持っていたからだと思えます。同時に忘れてはならないのは、当時の教職員の方々が学園の教育方針に心から賛同し、日夜を分かたず教育に努力された賜物であり、更には生徒たちが真剣に自ら学び自らを磨こうとする心が強かったことによるものだと思います。こうしたことの結果が、今日の学園の基礎となったと言っても、決して過言でないと思えます。

古市の校舎が、今一つ学校としての外観が整っていなかったため、旧可部町立中学校の校舎へ移転したことは、本学園が名実共に整って、今後の発展をまた大きく左右したものだと思えます。

現学長の退院後の闘病生活の中での教育実践は、他の方々が述べられると思うのでこれは省略しますが、その期間のうち、文理大の二年生の私は、昭和二十三年九月から約一年間可部高校の夜間部と高宮中学校の数学の非常勤講師として勤めをさせていただきました。当時の高等学校の夜間部の生徒たちは、ほとんどが勤労青年で、中には私と年齢も同じぐらいの人たちも多く、非常に熱心な勉学態度に身の引き締まる思いをし、その当時の人たちの何人かと今に交際を続けています。その頃の高等学校には現今の進学率九八パーセントというような雰囲気はなく、勉学意欲の高い者のみが学んでいる状態でした。

また本校が二十三年の四月から七月までお世話になった高宮中学の海渡校長先生のおかげで、一週五時間の授業を受け持たしていただきました。当時の義務教育の新制中学校の生徒たちは、質素でほんとに純朴でした。私は可部線の古市橋駅から乗車しますが、担当している生徒の一人で八木駅から乗車する女生徒が、必ず車中で、また可部駅か

ら学校までいつも一緒に歩きながら、学校のこと家のこと自分のこと友人のことを切れ目なく話すのを、私は毎週一回聞くのが楽しみでした。これもその思い出のひとつです。その彼女も今はよい母、否よい祖母になっているかと思いますが、その頃の中学校から高等学校へ進学する者は、約一五パーセントでした。

戦後昭和二十二年に新制中学校が義務教育となり、旧制の中学校は新制の高等学校となったのですが、それに進学する生徒は戦前と同様に、戦後昭和二十七、八年頃まではごく少数の人たちが学んでいたのです。そのような世相の中で、短期間で将来の婦女子としての教養と家庭技術を修得できる本学園の教育方針と内容が、多くの農村の保護者と女子の要求に応えていたのです。時代が進むにつれ戦後の混乱期もようやくおさまり、日本全体が経済的にも段々と余裕が出てきて、高等学校への進学者は年々漸増の傾向をたどりました。それにつれて昭和二十八年頃から後は、本学園の生徒数もそれ以前のような急増期を過ぎて、総生徒数は大体において三百名余前後で、変動のない時期が続いたことは、当時の社会情勢進学情勢の推移を示しています。保護者、並びに生徒の要望は、教養・技術的な実力だけでなく、社会的にあるいは公的に認められた高等学校卒業の資格も得たいという方向に漸次変わりつつありました。このような社会的要請に応えねばと、昭和二十九年末頃から高等学校の家庭科を創設することを考えて、そのため

の教職員の採用、校地、校舎、並びに教具・図書等の備品充足、および申請等の諸準備を始めました。そうして昭和三十一年九月には、可部町中島小松原に約二万二三五〇平方メートル（約六七七〇坪）の校地を買収、高等学校設立のすべての基準を充足し、昭和三十一年十二月二十三日に念願の広島県可部女子高等学校の設立認可を県から受けることができました。

かくして、広島県可部女子高等学校の開校式並びに入学式を、昭和三十二年四月十五日に挙行しました時は、

高校家庭科生徒

一五七名

女専の本科・研究科・師範科生徒 二二七名

教職員 三一名

寄宿舎生 一五四名

高等学校設立により、学園全体の生徒の総数四八四名となりました。

その後、年々中島校地の拡張と校舎の増築をし、家庭科の他に昭和三十四年には商業科、昭和三十七年には普通科を増設し、昭和三十七年度の高等学校は八百余名の生徒を数えるようになりました。また同年一月には、可部女子短期大学被服科を文部省より設立認可を受けました。これは、昭和二十三年四月十五日に広島県可部女子専門学校を設立して以来、三カ条の学園訓による教育方針を中心に鋭意その具現に全職員全生徒が努力し、その校風を樹立したことの一端が、この生徒数に表われたものといえます。

学園訓は、創立以来、教職員は職員朝礼で、生徒は始業前のホーム・ルームの時間に全学が一斉に唱和して、日々一步一步その精神に近づくように努力することを誓い合っていることは、今日もおお続いています。五十六年八月に完成した高等学校の新校舎には、校舎の全教室を始め、校長室・職員室・会議室・図書室に至るまで、学園訓三カ条が同じ大ききで同型の額に入れて掲げてあります。このように私たちは、建学の精神をいついっまでも継承し、その内容の具現充実に励まなければと常に思っています。そしてそのことが、本学園に奉職してご奮闘くださった諸先生への報恩につながり、また多くの卒業生の矜持へもつながる私の責任であり義務であると、常に自分自身にいいきかせています。

エピソード

学長は、数字では「八」の数が大のお気に入りです。これは日本民族特有の「八は末広がり」、「非常に多数」等々、縁起のよい数字であるという思考にひかれてのことなのでしょうが、本人はそれが特に顕著です。

その例として、可部町中島地区に昭和三十年頃より約三六〇〇〇平方メートル（約一万一千坪）の土地を多くの地主から譲り受けて、これを何筆かの土地に合筆登記をしましたが、その時に学校の所在地の代表地番が一八一〇番として八の字を入れています。次に昭和四十一年に大学用地として求めた上原地区の土地も同様に、多数の地番を合筆して代表地番は一三三八番地。また昭和五十六年には附属高校の敷地として求めた土地の代表地番も、十八番地となり、今日までそれぞれの地区での地番はいくつかありますが、代表地番には必ず「八」の数字が入っています。それについて、次のような話があります。

昭和二十五年の暮か六年の春か定かではありませんが、学校にも電話を持たなければということになりました。当時の電話は、まず器具は木製の箱型、ベルは手動、送話器と受話器は別々。また当時電話は大変な文明の利器で、お医者さん、商人でもちょっとした資産家でなければ持つておらず、戦後の物資不足、その上回線不足等の時代で、電話取り付けの申し込みをしてもなかなか取り付けてもらえないで、順番を待たなければならぬ状態でした。このように、古市郵便局（当時は現在の電々公社はなく郵便局が電話電報の取り扱いをしており、交換台も手動で交換手が加入者と直接話をしながら通話相手に継いでもらうようになっていました。）に電話取り付けの申し込みに私が参りましたら、郵便局長が直接会ってくださって、学校だから特別な配慮で早急になるべく早く取り付けるように努めました。ようとの返事をいただきました。

それから、たしか三カ月後に局から呼び出しがあり、「取り付けをいたします。費用はこれこれ、番号は古市局六

十四番です。」というお言葉。厚くお礼を申しあげて学校に帰って報告しますと、即座に、六十四番というのは六と四の縁起の悪い番号だから変えてもらおうよう交渉して来なさいとの、すごい剣幕の命令。またも小生、いかがいたしたのかと思ひながら、すぐすと郵便局に行き、局長にその旨申し出ると、局長は「学校ともあろうところがあるような縁起をかつがれるとはいささか心外でございます。また番号は取り付け順番になっているので、変えることはできません。」とのご返事。ごもっとも千万、なんの返す言葉もなく、どうしたらよいやらと、局長室から出てすぐと学校へ帰る途中、「六十四、六と四、番号は変更できないし、縁起にはそぐわないし、この番号で説得するよい方法はないものか。」と思案しながら考えついたことは、六十四は八と八の掛算、八を二つ掛け合わせてできる数字、すなわち縁起のよい数字を八倍したものだということ。そうだ、これだ、というので、これを解説(?)しましたら、一ぺんに機嫌がおさまり、古市校舎時代の電話番号は古市局六十四番となりました。それからというもの、八と八の掛算、末広りの八倍、これを思い起こしては、末広りの発展に努力しなければと思っています。それにつけても、八の数字がよほど好きというほかはありません。

(武田学園理事・広島文教女子大学副学長)